

いななまき



はじめに

土 田 三千雄

二年近く海外に居て、ただ名前だけの部長であった上に帰ってから、その留守の間の借金に追われてひまはなし。更に今度は就職部長を兼ねるということについて、この頃は綱島へ行つて見ることもまれになつてしまつた。ポツポツ有名無実化しつつある。

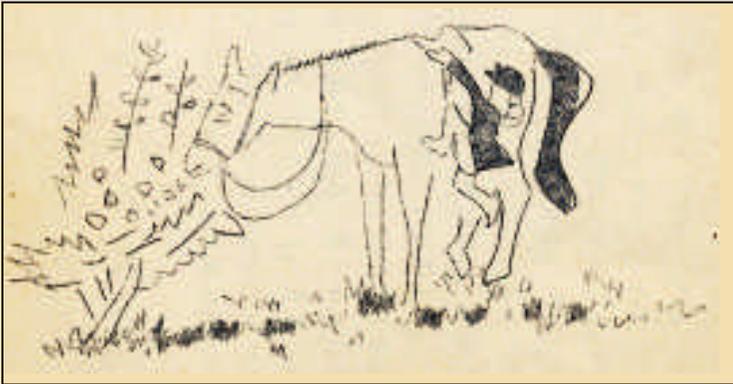
幸なことは、部民が、もともと好きで集つたものばかりだからちゃんとやつていつてくれるし、それに何より有難いのは青木会長以下の緑鞍会の先輩諸君の庇護至らざるなきことである。

部員数も又部の活動の内容も、部長の空位化に反比例して充実してくることは有難いことだ。

頭の痛いのは綱島の住民の色んなお叱りである。院長をはじめ学院当局のこの頃の頭痛の種である。

いまはできるだけ、清潔にして御隣家の迷惑にならぬをいよう心掛けるだけ。

御隣家の方々も若い学生の身心の鍛錬の姿をみて御寛容願えるものと信じている。



新入部員を迎えて

主将 堤 義則

入部してからはやくも五ヶ月を数え、その間当番試合合宿等と数多く経験し、殆んど部の性格は理解したものだと思ふ。馬という生き物を飼育管理する事、馬に乗るまという事の困難さ、シーズンオフのない、朝早くそして、雨風に関係なく行われる練習と多くの試練に直面してきたであるが、君達の前にはまだより多くの種々な障害が待ち受けているのである。この障害を拒止逃避せずに勇氣と忍耐とを持って飛び越し、突き破り、先きへ進んでほしい、そして君達人一人がこの部の支えとなり力となつて、発展するということ事を自覚し、自主的に行動して欲しい。

この馬術という紳士のスポーツから騎士道精神を身につけはやく「ナイト」の称号を得られん事を望む。頑張れ！田舎の紳士よ！

馬術部に入つて

短大一年 桜井 智恵

私が馬術部に入ろうと思つたのは、別に馬に乗るのが幼い頃からの夢だつたとか、前々から機会があればなどと常日頃から考えていたわけではない。只クラブ紹介でこう云う部もあるんだを、高校の時はなかつたつて、もし乗馬が出来るようになったらどんなに素適かしらなどと強い好奇心のみで入部したのだつた。だからもちろん娯樂的を気分は多分にあつたが、練習の日数を重ねていく内にこの感情は捨て充ければならなかつた。と云つのは、練習がこんをに真剣だと思わなかつたから。綱鳥へ来て初めて練習を見た時何てきびしいのかしらと思つた。そして上級生との区別がはつきりしている。大声を張り上げて注意をしているのを体を堅くして見つめながら純習申は決して笑つたり、ふざけたり、おしゃべりなどとても出来ず、もしそうしたら大変な事になると不安になつたものでし

た。このように第一印象はとも冷たいものでしたが暗いと思っていた人達も皆朗らかである事が次第に解ってきたのです。入ったばかりで勝手が解らずまごごしている時に、少しでも何か親切な言葉をかけてくれた時にはどんなにほっとしたか、新入生誰でもが感じた事でしょう。二ヶ月経った今でも変らずうれしい気持です。馬本位の馬術部で馬を可愛がるのは当然ですが、私が最初にそう云う感情が動いたのは栗毛の青渚だった。若くて活気がありはねまわっていたので目に付いたようです。静かな青剣は男性的で堂々としたりっぱな体格から二番目に覚え、あとの三頭もそれぞれ特徴があるのですぐ見分けられるようになった。今でも馬は恐いと思っけれど、次第に可愛いと馬の気持を知りたいとも思ようになった。

朝早い練習に自信が無くて、この部に入りたくても入らない人が居るし、入部しても続けられそうにもないと早々と止めて行つた人も居る。朝のすがすがしい空気の中する練習は暑い日中よりもどんなに能率が上がるかもしれをいが、その後の授業がつかいのには困るし疲れて眠くて仕様がないうえ、お腹も減る。クラブ活動と云うのはあく迄も授業の二の次で、このた

めに授業が妨害されるようでは無意味だと思いが、それををくするために睡眠を多く取ろうとすると自然自分の時間と云うものが制限され、次第に不自由を感じるようになる。今でも馬術馬術とこれに追いかけていよう嫌だとこぼしている人も居るようだ。実際短大と云う毎日ぎつしりつまつた時間表の中で早く終る日に当番があるのだから空いているのは日旺のみと云う遊ぶ間も無い忙しさ。時には試合で日旺のみれるとをると、一体いつ、身体の休まる日があるだろうか。短大の学生生活の中で色々多くの事を経験し（実際馬以外の事も学べる）この部に入った以上楽しい思い出として残るように努力したいと思っていま

一年 藤田 緑也

四月十七日、朝五時目ざまし時計のベルが鳴った。急いで身仕度をして家を出た。

外はまだうす暗い。その日まで五時に起きたことは旅行やその他の特別な日以外には一度もなかったこと

である。六時五分前渋谷駅に着いた。前日の部会でかすかに記憶のある二三人の上級生が改札口に立っていた。その人達につれられるまま網島という所へ着いた。そこから約十分、どんな練習場かと好奇心と不安の気持で歩いていくとある小さな橋にさしかかった。そしてその瞬間するどい悪臭が鼻をさした。ここが馬場だなということがそのにおいでわかった。それからきたない小屋へ案内され、すぐに馬装しろといわれた。顔も名前も知らない先輩のキロツトをはき馬場へ出た。

不安な気持のまま初めて馬の背中にまたがった。

それからすでに二ヶ月馬術部員一年生としてつらいことばかりであった。「どうしてこんなクラブに入ったのだらう」と今さらその時の気持を思い返している。しかし入部したからには男としてやめることは出来ない。卒業するまで続けるつもりである。入部してからまだ短かい期間で部生活はつらく、苦しいことばかりであったが日増しに自分自身のものになりつつあるように思える。

馬術部員として感じたことに、まず練習場が他のクラブに比べて非常に小さいことが目についた。しかも他

のクラブは馬術部ほどの練習をしているようには思えない。非常に不公平な感じがする。又他の運動部と異なり朝練習するので一年中睡眠不足になるのではないかと心配される。そしてそれに慣れないせいかたいした運動もしないのに練習が終ると体全体がぐったりしてしまう。

又締習するだけがクラブ活動ではなく普段部員同志が話し合うのも部生活の一端であると考ええる。それに付けてももう少し都員同志の打ちとけようがあってもよいと思う。

松田 悠子

とつても出来そうにないと思われたが、どうやら馬にも触れるようになったし、かわいいなと思うこともある。

はじめは、すべてが驚きであり、そして、こわかった。今までの静かな温室とあまりにかけ離れているので、勝手がわからず、戸惑い、何度も大丈夫かしらと思案してみた。もちろん、今だって心蔵は相当に圧迫

されるのですけど……。

朝の張りつめた空気のもとで行われる練習の、ものすごい掛声ならぬその音、あれでまず度坦を抜かれ、また音におどかされたせいもあると思います。

馬術は「厩七分に乗り三分」といわれているようで実際思ったよりずっと大変である。先輩顔なる上級生達の前で、どう見てもいいかつこうとは云えないいでたちで、うろちよるあるいはポカンとしている自分達を見る時、妙な気がしないでもない。しかし、部員としての生活が今の私にとって大きなささえになっていくことは確かなのである。身心を鍛えるにも、考えることをしないようにするにもよい機会だと思っている。

はじめのうちは、お嫁にもらい手がなくなるよと心配してくれた家の人達も、あきらめたらしく何もいわない。むしろ協力的になってきている。自信はもてないが出来るだけ皆についていくつもりである。

法学部一年 真野 勝

高校時代、自分は大学のクラブ生活を、幼い頃から親しんできた絵画への夢にあこがれていた。だからこ

そ、この馬術部に現在、自分の身を預けた事は、実際偶然の事で、自分でも予想しなかった事である。それ故、この事実は、これからの、自分の生涯において、記録すべき経験であり、そして又、重要な一つのエピソードを、それに明記されるべきものに違いない。それは単に、馬の背に股がつたり、馬を手入れしたり、悪臭の充満する寝ワラ作業の事だけではない。草刈りや時おりワラの中にもぐり込んで寝てみるのも、予想しなかったクラブ生活 - 大学生活 - ゆえ何故か分らないが、きつと自分には好い経験になるであろう。しかし、それよりも、自分には、まだ重要視すべきものがあるよう思われて仕方がない。それは、予想しなかった為の、予想もしない新しい人間のつながりの中に、自分を押し込んだ事である。自分は今、多くの先輩や、同輩達と共に寝、共に起きて生活している、(合宿)。

そして、毎日決められたような日程を、まるでレールの上を走らせられているかのように、時には不満をも口に出しながらも、自分は馬術部を身上としている。否、身上としているかのようにみせているのである。確かに、自分達一年生においては、先輩達のリードをうけながらも、何か鎖に縛られ、抑えられたような感情

を、時には感じた事が今迄にもあつた。馬術部と云う学生スポーツ活動における特殊な規律の中にあり、又世間からよく開かされるスポーツマンの規律における正しさを知ってはいても、やはりそこには、まだ慣れない特殊な社会性が感じられるからであらう。又、これらの生活は、自分が社会人となつた時、何を意味し何を自分に与えてくれるのか、当然の事と云え知らたからであらう。ここにおいて、自分が、馬術部員として、なし遂げようとする重要な目的が、明確にある。それは、自分が過去をふりかえる年代に入った時、始めて自分に、その重大さが何であつたかを明示してくれるものである。だからこそ、自分は、一介のクラブ員として、それを信じ又自己の確心として推進しようとするのです。

朝早く晴れた青空に、小さくしかし、雄々と富士の嶺をみる時、素朴にも、のどかな光景が綱島のグラウンドに見られる。激しく風が吹きすさび、砂嵐がみまうとき、そして又、雲がたれ、やがて激しく雨に降られるならば、自然の緊張と、個々精神の戦いが、そこでみられるであらう。綱島の、馬場の土は新しい。我々新入部員が、この四年間、新しい土の上に、何を積ん

でいくかは分らない。しかし、我々新入部員が新しい土の上に、新しい伝統の足跡を残したいのと同様、我々の心にも、その土の伝統ある香りをしみ込ませていきたい。

細田 昭子

この部に入っていて、一番楽しい時は、馬と一緒に居る時です。何だか人間の様にわずらわしい感情問題もないし、誰よりも私の気持を分ってくれる様な気がするからです。青年期の者は同じ年令の者が自分の告白を聞いてくれるだけで、自分と同じ立場からの共鳴者を得、力強く感じる事が出来るそうです。いくら私が青年期だからといって、馬が私と同じ立場にあり、同じ考え方をするので、馬と一緒に居るのが楽しい：なんていう事はあり得ません。(もしそうなら、私は今こんな所に居るべきじゃありませんよね。)馬は結局人間に頼って生活するより外に手はありません。私の方としては、馬の手入れなどしているうちに、馬が自分のみを頼って生きている様な気分になり、親が幼児に感じる様な愛着を持ちます。その結果、子供の思

考が親のそれを反映する様に、馬も私の考えをしていく様な錯覚に陥いるのではないかと思うのですが。そして、馬が私の事を理解する様な考えとなるのでしよう。錯覚などは、はやいうちに除くべきです。でも私はこの錯覚を四年間喜んで受け入れていくつもりです。

但し、馬が暴れる時には、一緒に居れば居る程心楽しからぬのは確かです。

入部の感想

英米文学科 高橋 和子

入部して

馬術部を選びし我は

可愛ゆらし愛馬の瞳に力湧き来る

乗馬着をまとして馬上にまたがれば

我身ながらの姿たのもし

遠乗りにて

たてがみのやさしくゆれて緑濃し

短大国文科一年 米屋 典子

当学院に入学した際、クラブ活動は消極的にやる

う
と思つた私でした。ですが、今日この頃何の縁か、毎朝毎朝早く起きて馬と共に駆け廻っている、という所までいけばよいのですが、そうなるうと頑張っている自分にちよっぴり驚き、そしてそれを長年続けていらつしやる平木コーチ、先輩の皆様になからぬ尊敬を払っております。

本当によく先輩の皆様は馬を可愛がります事、入部した当初は馬にさわるのも何となく恐しくて、側にもよりつかなかつた私には非常な驚異でした。でも二ヶ月余りたつた今、何とか馬に恐しがらずに触れる様にはなりました。ですが、まだまだ正直の所馬が可愛くてたまらないという訳にはまいりません。が、早くそつなりたいと思っております。

楽しかつた遠乗り。前の晩、駆け足等して落馬しちやつて動けなくなつたらどうしようなんて思っていたのに、大学に来て初めてと違っていい位、本当に清々しり気分を味わいました。くつきりと紫青色の高貴な

富士、その富士を見たゞけでも遠乗りに行つたか
ありました。どれもこれもみんなを馬術部に入つたお
け、この感激を忘れずにこれからも毎日毎日張切つて
乗つて行こうと思つております。馬を愛し、先輩に敬
意を表し、同僚と励まし合いながら。

本目 晋

六月七日

合宿第一日目である。

朝五時、堤さんの「みんなを起きろ」の一声で全員
起床。どの顔もねむそうな顔ばかりで充分寝たりた
という顔は一つもない。昨夜、力に刺された所をかき
かき寝わら作業が始まる。これも寝不足のためか、な
かなかはかどらない。練習は六時半に始つた。これは
二年生以上の人しか乗せてもらえないので我々一年は
見学である。「あぶみ上げ 三十分を皆な良く乗り落
ちる人が少ないのは、さすがに上級生だけのことはあ
ると思つた。しかし乗れないとわかつていながら見て
いるのは何といつてもつまらない。気持ちに張りをもて
ない。手入れにも身が入らない。

これから二十日間同じ様な日が続くだろう。しかし
私はこの合宿によって何か得る所があるだろう事を期
待し努力するつもりである。

エの土屋節子

私は運動が大の苦手である。私ばかりでなく妹達も
そろつて運動は苦手で両親もスポーツへの関心などあ
まりもたぬような家庭に育つた者である。それがどう
いう風の吹きまわしか（後で落着いて考えるとどうし
て入る気になつたか理由が誠に漠然としている。勉強
だけの毎日に退屈していたからか、しつかりした考え
をもつて入部してきた方々に比べて恥ずかしい）「馬
術部にはいろいろと思つ」などといふだったので家族を
驚かした次第である。運動と名のつくものは教科の体
育をしたぐらいのものであるから運動部についてなど
少しも知るところはなかつた。入部をしようとなると
どんな風に練習しているのか、いろいろ心配になつて
高橋貴保子さんをお願いして馬場に連れて行つてもら
つたのである。（私が入部しようなんて気を起した原
因の一つは同級の彼女がいたからである）その時私は

馬 齡 半 歳



二月一五〜二八日 春季合宿

この合宿の目的は馬場作りと障害作りの合宿であつた

三月四・五日 オリソピック記録講習会

オリソピックの為の第一同記録講習会が馬事公苑にて国際規定の三過失失権にて行われた

成績 青麗（金子） 第四障碍失権

青光（岡） 三落下にてゴールイン

青渚（高倉） 第六障碍失権

生まれて初めて馬に乗つたのであるが、乗る事自身はそれほど恐くもなかつたけれど号令や注意がはじめての私にはなんともすさまじいような感じでシヨックをうけた。しかし、シヨックではあつたが「入るのをよそう」と思わなかつたのはなんともいえないような緊張と不安のいりまじつたような楽しい気分私をさせたからである。その後いろいろ都合が悪くて五月から入部したが（その間優柔不断な私はしばしば気が重くなつてやめてしまおうかと思つたがとにかく）久しぶりに馬場について新入生達が上手になつてしまつているのに驚いてこれではいけない、出来るだけの努力をしてみようと思ひ直して今日に至っている。

練習は私が予想していたよりきびしく、強制される事項が多くて少々きゆう屈に感じられることもあるが規律があつてよいと思う。

私は性格がとてむ引つ込み思案なので他の人のようにきびきびと仕軍をみつけ、片づけていくことができなくて途方にくれてしまうことがよくある。早く仕事を覚え、馬に馴れ（私が馬に馴れ、馬が私になつてくれる）部の方々ともなれるようになりたいと思う。

三月二二日・対学習院女子定期戦

レギュラー戦

本学		学習院	
原田	-79	峰好	-18
高尾	-81	青麗	-11
渡辺	-7	青光	-10
菊地	-199	東秀	-185

学習院		本学	
岡田	-69	峰好	-189
克脇	-127	青麗	-28.75
甲斐	-46.5	青光	0
藤	-89	東秀	-175

その差一四四点にて本学の負となる

その差六三、二五にて本学の負となる

三月二二・二三日 第七回関東女子学生馬術リーグ戦
 参加校 青山学院、農業大、成城大、早稲田、慶
 応、学習院の六校

対慶応戦

慶応		本学	
尾崎	-195.5	稲玲	-149.5
中塚	-201.5	城雪	-157.5
森	-197.5	飛仙	-31.5
永田	-177.5	東秀	-161.5

その差 272にて青学の勝

青学		学習院	
高尾	0	勝早	0
井田	-107.5	慶光	-120.5
原田	-89.5	桃葛	-149.5
菊地	-235.5	昭南	-237.5

対学習院戦

その差 75点にて本学の勝

短評

猛練習の成果が実つて連覇したことは喜ばしいかぎりである。特に今年度対学習院定期戦に苦杯をなめているので選手一人一人がファイトでぶつかっていったことがこの戦果をもたらした

たもつとも大ききを要因である。

井田……最上級生として無難に騎乗していたが騎座が不安定な感じで、それを補うファイトももつ

少しほしかった。

菊地……一戦一戦ファイトを出しきっていたことが感じられた。しかしその反面扶ジヨの荒さが目立った。

青 学			早 稲 田		
原 田	0	明富士	-3	伊 東	東 田
菊 地	-160	東 秀	-204	村 林	村 田
井 田	0	ケイフェア	-104	小 林	中 田
高 尾	-197	慶 光	-140	田 中	

その差 94点にて青学の勝

成 城			青 学		
山 崎	0	光 和	0	高 尾	尾 田
富 工	-201	明 桜	-159	井 田	原 田
福 井	0	峰 好	0	原 田	地 菊
村 上	-235	慶 花	-123	菊 地	

その差 205にて青学の勝

農 大			青 学		
楠 堂	-104	セイウン	0	高 尾	尾 田
野 村	-235.5	明 桜	-237.5	井 田	原 田
沖 村	-157	飛 仙	-161	原 田	地 菊
内 山	-183	稲 玲	-112	原 田	地 菊

その差 205にて青学の勝

高尾……満点馬は一応

乗れてほいるが少々クセのある馬となると、推進力に欠けていた。

原田……比較的重い馬

に乗った訳であるがやはり推進に欠けていた。拍車の便い方など十分研究してほしい。

対早稲田戦

対成城戦

対農大戦

三月二四～二九日 関西遠征

参加者 堤、岡、高倉、飯田、神藤、小宮、

山田、鈴木

成績

対愛知大戦 敗

対名古屋大戦 勝

対愛知新人戦 勝

対大阪府立大戦 敗

対神戸大戦 勝

対甲南大戦 敗

対関西学院戦 敗

三月三一日～四月一、二日 関東学生馬術新人戦

鈴木…一応満点で、コールしたが、まだ不安定で、

特に随伴が悪い。また障碍誘導の際も、押しそして

出すということができない。また慶降号での経路違

反はおそまつ。もつと落ち着いて乗らなければ、と

にかく満点馬に騎乗した時も最初から長後まで同じ

調子でまわっている。なお一その努力が望まれる

ところ。レギュラーへの道はけわしい。

伊藤…：騎坐、脚はしっかりしているが推進力に欠

ける。また、軽卒な点があり、それが麻緑、麻王で

の減点となってあらわれている。

対成城戦

成		城		青		学	
鈴木	0	桜	烈	0	鈴木	木	藤
伊知地	-97	麻	緑	-10.25	伊	小	山
谷上	0	栄	専	0	山	田	
大森	-10.5	峰	好	-25.75			

その差 71.5点にて本学の勝

対茨城戦

茨		城		青		学	
丸山	-14.5	慶	隆	-143	鈴木	木	田
出沢	-223	春	風	0	山	小	宮
広木	-199	聖	栄	0	伊	藤	
瀬戸	-84	慶	駿	0			

その蓋 545点にて本学の勝

おさえるところは、しっかりおさえ、出す時は思いきって出すように。

小宮…：この試合に関する限り彼は非常によく乗った。出場選手中でも出色のでき。これに満足せずなお練習に励み一その確実性をつけてほしい。

山田：鈴木と同様不安定で、随伴が悪い。峰好号での落馬は、お話にならない。あまりにモロすぎる。こつした重い馬に騎乗した時の彼の脚力の不足は、目をおおうばかり。フアイトにもかけるようだ。

青 学			慶 応		
鈴木	0	桃	程	0	武 郎
伊藤	-14	麻	王	-6	梶
小山	0	栄	専	0	武 元
	-3	ラッキーセカンド		-3	円城寺

その点8点にて本学の負

春風にはよく乗ったが、ラッキーセカンドでは、見る方をハラハラさせた。練習、そして練習と猛練習あるのみ。

第一試合は、実力で勝ったが、第二試合は経路違反が出たりして危く、相手選手の手ヨンポに救われた感じで、最低の試合。

第三試合は、負けはしたが、三試合中一番いい試合だった。実力は決して劣っていない。たゞ馬群の不利が、そのまま、試合の結果に出た感で、残念ではあるが、仕方のないところであった。

とにかく四人共実力を出し

きってよくやった。

今後いつそう練習にはげみ、次はレギュラーとして、立派な試合ができるようになって欲しい。

四月二日 関東選手第一次選択会

四月九日 堤 岡 高倉の三名が出場したが落選した。
対関西学院オープン戦

関 学			青 学		
神崎	0	飛	仙	-3	小 官
島田	-153	勝	姫	-179	鈴 木
前田	-253	桜	月	-195	斉 藤
星野	0	城	青	-9	山 田
高橋	-111	桜	勲	-154	堤
楠	-113	飛	スイ	-171	高 倉

その差84点にて関学の勝

(評) 宿敵関学を迎え

てのオープン戦が四月九日馬事公苑にて行われた。関西遠征に於て完敗し必ず雪辱をと期したのであるが結果は又も完敗であった。僅か斉藤が桜月に騎乗し六〇点食ったのみであった。実力の不足を痛感させられた。夜渋谷のクジラ屋で親睦会を行った。

四月二十九日 グランド開き記念対立教大定期戦

〔成績〕 レギュラー戦 勝

新人戦 勝

〔評〕 グランド開きの体育祭の行たわれている中で対立教定期戦が網島の新馬場で行なわれた。

あいにく好天気ではなかったのであるが、馬場のコンディション良好、その上応援の観衆が馬場の周りを取りまいていやが上にも試合のふんいきを盛り上げていた。エールの交換の後すぐ試合に移ったが全員よく戦いレギュラー戦に勝、続いて行われた新人戦にも勝ち対立教戦に圧勝した。

五月五日 東京都民大会（憲法大会）

中障碍は東京大会の予選も兼ねた試合

成績 育剣（堤） 第七障碍 失権

青渚（高倉） 反抗一分 失権

青麗（神藤） 第三失権

月雪（一言） 第七失権

青光（岡） 一落にてゴールイン

青剣、青光、月雪は東京大会の出場権を得た。

五月六日 関東学生貸与馬能力検定

青剣、青渚、青麗、青光、月雪の五頭全部合格した。

六月三、四日 東京大金

中障碍競技は憲法大会に於て予選通過した馬匹のみ参加出来る事と成っている。

成績 青剣（堤） 中障碍 最終障碍にて失権

六段 三完飛二落

青渚（平木） 婦人障碍 最終障碍失権

（高倉） 六段 失権

月雪（高尾） 婦人障碍 優勝

（鈴木） 六段 二落

（ ） 中障碍 第六にて失権

青斑（山田） 六段 失権

六月七日～二十八日 合宿

二十四日～二十八日の関東学生リーグ戦にそなえての合宿である。

六月十五日 四大学定期戦

先年度優勝とこの定期戦に於て輝かしい成績を上げている四大学定期戦が今年も六月十五日行われた。関東のリーグ戦の前でありこの試合に大いに期待したのであったが結果は一勝二敗とあまりかんばしくなかった。農大を除き他は一部校であり実力もそれなりに伴っている学校であるので好試合が出来ると思ったので

はあるが、まだまだ線の細さな感じ、関東のリーグ既に一抹の不安を感じた。

対農大戦

青学		農大		
山田	-27.5	ラッキーセカンド	-6	野本
神藤	-7	豊姫	0	榎上
堤	-50.75	桜日	-44.25	吉任
高倉	-235	桜月	-235	松村
伊藤	-11.25	栗早	-3	斉藤
小宮	-208	桜勲	-283	

差11.75点にて青学の勝となる

対日大戦

日大		青学		
田中	-9	ラッキーセカンド	-4	飯田
安斉	-6	豊姫	0	神藤
田島	-122	昭南	-135	高倉
粕谷	-3	法月	0	小宮
長谷川	-3	栗早	-5	伊藤
島崎	-235	勝姫	-239	堤

差5点にて日大の勝となる

対農工大戦

農工大		青学		
大石	-3	法月	-9	小官
勝山	-199	桜勲	-219	堤
田中	-215	桜月	-235	飯田
鬼塚	-3	桜烈	0	伊藤
岡崎	-139	昭南	-235	岡
中先	-235	勝姫	-235	高倉

差139点にて農工大の勝となる

六月二十四、二十七日 関東学生馬術争覇戦
部の最大行事であるこの試合。二十日間全員合宿し、よく練習し、馬の研究もし、練習試合もし、あらゆる事をし人間の気力も充分整い試合にのぞんだ。どうしても勝ち、一部へ入るのだと……

その結果は、惨たんたるものであった。こんなにもでもしたのに何故だろう。何故なのだ。二部の最下位じゃないか。どこがいけないのだ……。

考えは尽きず。
第一試合対宇都宮戦
前年度三部優勝し二部へ入ってきた学校で実力はそれ程無いが絶対に安易に考えたわけではたい。馬群は難馬が四頭と我校にとつては有利とは考えていたのであるが、ところが満点馬と思っていた法勝で経路違反

という試合以前のものが出てしまった。径路違反だけは絶対にするなとあれ程云ったのに、結局その失点が最後までひびき第一試合を失つ。何も云いたくなくたってしまふ。

個人批評

金子

一つの事を意識しすぎてあの結果となつてしまつたがもつと余裕をもつてほしい。

伊藤

推進力に欠ける。体力的にも負けるところもあるが、衡受と推進の關係をもつと研究すること。推進もその必要な時に瞬間にする事(タイミン

宇 都 宮			青 学 大		
鈴木	-10.75	法勝	-110.5	金子	子藤
篠塚	-131.5	桃ハク	-125.5	伊高	倉倉
萩津	- 14	麻月	- 4	高小	飯宮
沼部	- 0	麻慶	- 0	飯小	田田
橋本	-127.5	麻風	-151.5	飯堤	
浜野	-227.5	麻慶	-157.5		

差52.25点にて宇大の勝

東 京 大			青 学 大		
高瀬	- 3	飛鳳	0	伊藤	
徳田	- 3	法月	0	岡	
国信	-155.5	昭南	-167	堤	
南	- 3	ツキ	- 3	飯田	
吉田	- 4	麻月	- 7	高倉	
池田	- 0	豊姫	- 10	神藤	

差21点にて東京大の勝

立 教 大			青 学 大		
江橋	- 0	桃桿	- 0	一言	
高橋	- 16.5	法勝	- 12	小宮	
山西	- 22.5	麻月	- 8	高倉	
朝比奈	- 0	栗早	- 0	飯田	
石黒	- 0	麻緑	- 0	堤	
小池	- 6	麻東	- 8	伊藤	

差17点にて青学大の勝

対宇都宮大戦

対東京大戦

対立教大戦

負けという事はない。
高倉 初めて試合に出る馬で性格がよくわからなかったがよく馬を手中に入れ落着いて乗っていた。
小宮 満点馬を満点で帰つてこないという事は気が欠けている事と思つ。
飯田 この馬にはむかなかつたと後で思つたのだがそれよりも上の技術が劣っていると考

えるべきであろう。やはり衡受と推進のタイミングが悪い。それに上で暴れる事がいけない。あれは決して推進しているとはいえない。衡受が悪く運動の邪魔する方が大であろう。

堤 止られてからの処置が悪い。飛ぶ体勢にしてから向けるべきである。又衝がはずれてしまう事度々喰えたのは相手がオソマツであったが為だ。

対東京大学戦

東大には弱いというジンクスを今度こそは破ろうとまた緒戦に負け一部に止る最後のチャンスと皆よく健闘すれど一頭の難馬（昭南号）で勝負が決った。昭南に騎乗した堤は後段で期待され第三障碍まで通過したが第四へ向う隅角で衝がはずれ拒止され、それからどうしても飛ばしきれず結局前段より悪く敗れる。これで今年も一部は駄目だという考えより二部に残れるかどうかの心配が強くなった。

対立教大学戦

三部で優勝し、二部で奮闘した立教もツイていないというのか二敗を契つし、最下位決定戦で我校と戦う事になった。相手校には又やりなおしすればよいという感じで何か余裕がみられるようであったが我校には

三部にはどうしてもいけないという必死なものが皆の顔にあふれていた。試合は難馬は無く、完全試合ができるのではないかと思われ障碍一つ一つに注意がはらわれ相手校の阻雑な騎乗に対し、非常に慎重に騎乗し案に相違し楽勝であった。これどころか二部に残ることができた。三部にいつて、あらたに技術・精神を鍛えなおした方がよいともいわれたが、やはりホツト安心することができた。我部に於いては技術的には他校と位へ劣るものではないが気力・精神面に欠けるところが見られる。障碍一つ一つに対して注意、飛ばせるといふ心（気力）がない。拒止されても、しょうがないというふうな考え方、満点馬を満点で帰れなという事は何よりも人間の不注意である。

また拒止されて、しまったでは遅いのである。その前から飛ばせる体勢をつくり慎重にもつていけば拒止されることはない。又それだけの注意を払う余裕を持つてほしい。

この苦しい経験を基に我々は心新たにして練習に励もうではないか。

二度と同じ事を繰返さぬよう。

関西遠征見聞記

暗中模索

平 木 茂 子

藤 根 威

対府大、神戸、甲南戦を通して、本当に良い乗り方をしていると感心いたしました。これは私個人の感想ばかりでなく、一諸に行つた者、又對手方のOB現役の讃辞でもあつたのです。敗けた試合でも技術は、又馬術と云うものの理解は、相手方よりも数段優つていた様に思われました。

貸与馬は誘導と推進と同伴とこの三つが揃わなければ、仲々乗りこなせないものですが、往々誘導がいい加減になつたり、推進不足となつたりしてよく指摘されるところですが、しかし同伴迄考えて氣をつかつて乗る者は他校では、殆んど皆無と云つて良い様に思われます。只飛ばせれば良い馬がこわれようと若しかろうと他人の馬だからかまわない、又、それ丈の余裕がないと云うのが現状でしょうが、これは落下の原因や、鋭敏な馬では、障害飛越への恐怖感を与え、拒否、逃避の原因となることである。又それ以上に馬術の根本原則(馬の身になつて考える)の欠如であると思ひます。

約二〇日間、学生の強化合宿をみて来た。明日(二十五日)がその決算。結果がどうであるか、嫌な感じである。……勝つてくれ……そのみである。

四時一〇分、目覚しがヤケクソに耳元でガナリ立てる。夢中で手を延しストップする。

チクツヨウ！ もう朝か、

又ウトウトとしかける

“バカヤロ……”

自分を怒鳴りつける。思い切つて飛び起きた

この点、全員本当に良く気を使い、ズバ抜けて冴えた随伴をし見
ていても本当に気分が良かったのです。

誘導も全員慎重でそのためのエラーは全く見られませんでした。
これもいい加減になりがちのことだけに見事だったと思います。

結局エラーはと言うか欠陥は、推進が適切でないとそこに在るの
はないかと思われました。三試合を通して馬が如何なる場合でも落
着いていたことは学生の技術としては最高のものだと言出来ませ
が、貸与馬のため(と言うか万点馬ではないため)瞬間的に、適切
な推進をしなければならぬ時が往々にあり、それが上手く行われ
なかつた時が多々あつた様に思われます。結局これが敗因と言うか
ここに乗りこなし切れなかつた点があつたのではないでしょうが。
この感覚は言う迄もなく鞍数に依り養成されるもので、今後の努力
によりいくらでも進歩することが出来ると思います。

とは言ふものの鞍数を重ねる事くらい大へんな事はないのですが
ともあれこの面でも伸びて行けば、近い将来、名実共に日本一の馬
術部になり得る事を確信いたします。何卒、大いに頑張つて下さい
期待しています。

昭州六・三

冬でなくつて良かったな

そう思う

“ 全くだな ”

六時一〇分前馬場に着く。もう平木コ
ーチが騎乗中! :ここ何年間毎朝四時半

起きとか頭が下がる。俺だつたらと思つ

とつてもか前にや出来ないよ”

全くその通り。そんな強い意志なんか何
処にもない。現に俺は強化練習なんてサ
ポリたくつて仕方がない。何んで見に来
たんだらうとクヤまれる。

馬が良くなつたなあ……”

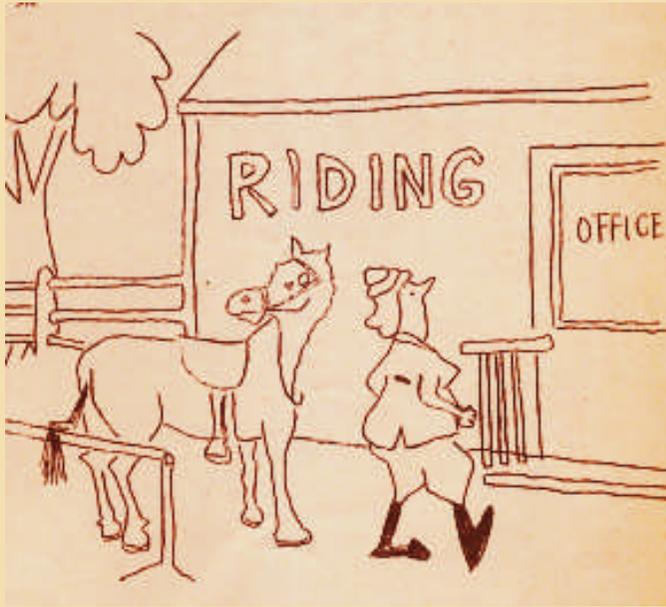
つくづくコーチの技術に感心する

学生にも一人位後に続くものが

居ないものか “

合宿日誌

高倉 彰



その一

六月某日 晴

トーナメントまで、余すところ一週間となった。一部への最後のチャソスである。もう二度とこないチャソスを是非共つかまなくて

練習中経路違反が連日出る。

こいつ等どう云う気持なんだろっ・
水をブツかけた。これは東の発明、全く
好いことを考えだしてくれたもんだ

宿直室、馬房の廻りが一日とてサツバリ
とした事がない。

習慣がそうさせてしまったのかな！
でも俺達の頃は毎朝、毎夕、いや気のつ
いた時、誰かが必ずやっただけどな！

授業を極力サボっている
変らないなあ……”

でも出来得るかぎり出ておかないと後悔
するよ……ここにその先輩がいるからな

騎座の弱い奴、ガタの来てる奴、普段乗

は。

思えば、長いようで短かい三年余であった。唯何となく安易な気持で入部し「こいつあ大変だ」と気がついた時には、もう止められなくなっていた。そして連日の練習、楽しかった事の方が覚えている。初めて二部のトーナメントを見た時、卒業までには、どうしても一部へ入りたいと思つた。

そして、最後のチャンスを迎えたのである。一部へそして王座へと夢は大きい。それが楽な道でないことは、百も承知である。だがどうしても勝ちたい。二勝して準決勝に残ったら秋まで又毎日練習である。とにかく何とか一部へ入りたい。二度とないチャンスをつかむ為最大の努力を払いつつ、一生の問題である就職の事も考えねばならない。だがこの二つを立派に果せて初めて、大学にり少、馬術部に入った価値があり、人間も少しは出来るのではなからうか。とにかくあと一週間頑張ろう。

又練習の夢をみて、大きな声で返事をする奴が出てくるだろう。夢で怒鳴る奴、答える奴、そして蹴つとばす奴、落馬しそうになつたのかしがみついてくる奴、彼らは全て、一部への道を行く青学馬術部のファイトのあらわれである。明日も又五時起床である。十五日に体調をベストに持つていけるよう留意しなければ。

さて、もう寝るとしよう。おやすみ

つているかいがないか一目瞭然……

大体強化練習で上手になろうなんてこと自体が間違つてる。強化練習は普段の練習の積み重ねを調整するだけ。重点はチームワークさ……”

学生が青光の夕テ髪を切っている。何んとなくモツタリとしている青光をみて髪をスイていたが

“暑ツくるしそんな感じですね”

と学生は切つた。あすこが悪い此処が悪いとキレイに仕上げた……（こう書いている本人も）

或る朝・コーチにドヤされた……

“カヤ八工が追えない……馬が可哀そう。……第一騎乗者のつかまる所もない” ……全くの不注意、申訳ない

馬糧屋が請求にきた。

その二

H · M 子

七月十日

ここで前段の人達と逢う。皆すごく元気そうである。私達もこの合宿を通して技術的に何か一つでも得、部員間の親睦がはかれたらと思う。最初の練習に藤田さんと初島に騎乗学校と違つてここでは全て自分達で馬装した。ポニーだったので馬装も手入れも案外楽だった。しかし一つだけ困つたのは、初島が側体歩なので軽速歩が出来なかつたこと。もつぱら姿勢の方に気を配つたのだが反省会の時ひじが開き前傾していると注意された。明日の練習では注意しよう掃除当番一班。

七月十一日

朝四時頃目が覚めた。こっそりフトンを抜け出て下へ降りて行くことですばらしい高原の朝を迎えた。冷やりと膚をなでる冷気、朝もやに包まれた山々、ちょうど墨絵を思わせる様だった。深呼吸を二・三回やって、しばらく自然の美しさに酔つていた。前から何か空虚な気持を持っていたが、この境地を欲していたのだと思つた。一年前の練習では藤田さんと初島に騎乗「分体止め」の時、一度で止められず、二・三歩チヨコチヨコ歩いてからやっと止まる様な具合だった。まだ脚の使い方がまずいらしい。前肢旋回は脚を使つ

現役時代会計に居たせいかすごく気になる。会計の立場になつたら一粒・一握りの燕麦、秣もこぼせない筈……馬糧に欠かせず備品も

練習終了後、一部のものが附近の川でザリガニを八ケツに二杯獲つて来た。天ぷらにするとかで一生懸命……人間童心に帰つた時が一番きれいにみえる。

馬術部員、馬に乗ることも大切だが、馬の手入、馬具の手入、装備……色々基本になることが沢山ある。一年生今から覚えておけよ

あれこれ文句を云いたがる

いろいろ欠点が目につく

終いにもう云うのもいやになってくる。

てなんとか出来た。昼食後自動車でサポテン公園に行った。この時大室高原の周囲を遡望した。すばらしい景色だった。

七月十二日

今日は朝のトレーニングの後反省会をやった。練習前馬丁さんの紹介があり、小室先生から注意があった。昼食後先生宅で馬学の講義、午後の締習では淡島に騎乗、全然調子長くいかなかった。蹬上げで速歩・軽速歩をやった。すこく足が疲れた。反省会では固い感じだからもう少し楽に乗ること、脚を引く事等の注意を受けた。全体的には、練習中の私語を慎しみ、節度を守ること、石を拾うことであつた。

七月十三日

六時頃まで雨が降っていたが次第に晴れて来た。特別に六時半起床。今日から一年生は全員前段に乗ることになった。待望の本当の馬に乗れて全然御機嫌だった。一生懸命やった。自分では調子良かったと思う。片手御法をする。やりやすいようである。

七月十四日

五時に起床して大室山に登った。前段の人達は十分で登ったと聞いたので、その記録を破ろうと懸命に登った。桜井さんが一番、九分足らずであつた。私は十二分位かかった。頂上では霧がまだはれてなく、全然視界が開けなかった。しばらく待ったが、時間の関係でやむなく下山、山の中腹あたりで霧もはれずばらしい景色を眺め

でも云わなきゃならない。

文句を云いをがらフツと考える……

俺も年を取ったらうるさい親父になるな嫁や息子に嫌れる親父になるな

「アイツマダケックコンスルキテイヤガル」

……これは或る人の声

もつすぐ学生は夏体だ。

つくづく学生がうらやましい

だがこの夏休みがクセモノ。普段良く乗る奴もグレルし、まして乗らない奴は思案の外、他人が乗らない時がチャンスなんだよ、主将にしたら頭の痛い所である

「×××……と呼ぶと新人はおびえる

”そんを目で俺をみるな”

と怒鳴りたくなる。もつと胸をはって歩いてもらいたいものである。僕は悪魔でも、まして神でも仏でもない……人の子である。

ることが出来た。今日で練習は最後になった。明日は遠乗である。またたく間に五日間は過ぎてしまった。この間受けたいろいろの注意は騎乗した時絶えず心に留めて少しでも正しい姿勢がとれるように努めよう。先生のお宅からくつきりと富士が見えた。明日は大室高原から去ると思えば寂しい夕暮に思われた。夜、クラブ、ハウスで先生、馬丁さん達も交えて楽しい時を過した。

七月十五日

合宿最後の朝を迎えた。いつものようにトレーニングをやって一年生は八時三十分馬装、遠乗をした。

帰り、クラブ、ハウスのそばに記念植樹をし、その周りで全員記念撮影、東拓の自動車伊東に送られた。

その三

真野勝

六月七日

合宿第一日である。

朝五時、堤さんの「みんな起きろ」の一声で全員起床。どの顔もねむそうな顔ばかり。充分寝足りたという顔は一つもない。昨夜か、に刺された所をかきかき寝ワラ作業が始る。これも寝不足のためかなかなかはかどらない。

練習は六時半に始まった。これは二年生以上の人しか乗せてもらえ

「アクマデモカミモコンナイオートコハイナイ」

会社に電話が掛つて来た。例の所だ

「この頃ちつともいらつしゃらないのね」
冗談じゃない……俺はそんなにタフじゃない強化練習は朝だけで沢山、夜の強化練習は当分中止……

「ホシガリマセソ、カツマデワ……チクツヨウ」

六月二十五日雨

対宇都宮大学戦にて

ついに経路違反が出る。どうしてでしょうね」と岩崎が泣くむ。なぐさめ様がない。

もう何も云えなくなつた……技術的にうんぬんする人がいた。でも技術的うんぬんと云える人は平木コーチを除いては誰もいない筈だ……問題はそれ以前のものと思つ。

若い、皆に若さがある

それでいいのかも知れない

ズルさがある……自分に

ズルさがない……試合に

それでいいのかも知れない

ないので我々一年は見学である。

あぶみ上げ、三十分を皆んを良く乗り、落ちる人が少ないのはさすがに上級生だけの事はあると思った。

しかし乗れないとわかつていながら見ているのは何んと言つてもつまらない。気特に張りがもてないし手入れにも身が入らない。

これから二十日間同じよつを日が続くだろう。

しかし、私はこの合宿によつて何にか得る所があるだろう事を期待し努力するつもりである。

OBの方へー 一般通信の際、十円切手をはるべきを郵

便局良の感違いで四円でよいといつたのでその通りにした所、アトで料金不足で十二円通微された方もあつたと聞きました。とんだ御迷惑をかけてしまつて相済みません。

九月十七日の試合が台風のため翌十八日に延びました。このことも御連絡不十分で御迷惑を掛けたことと思ひます。併せてお詫びしず。

緑鞍会係

自分で「皆に手伝つてもらつて」馬房の脇に四畳半位の個室を作る予定…予算五千元也後二ヶ月位皆をみてみたい…

新人の真野に、「一諸に下宿しよう」と云つたら

「四年間ですかあ…！」と来た

「冗談じゃない。俺にも女房もたしてくれ」

あれこれ勝手なことを書き並べた最後に僕の好きな詩三篇をコピー、現役に送りたい…：カイトノハエライヒト…

人見るもよし

人見ざるもよし 我は咲く也

君は君

我は我也 きれど仲よき

花は自分の美しきを知らず

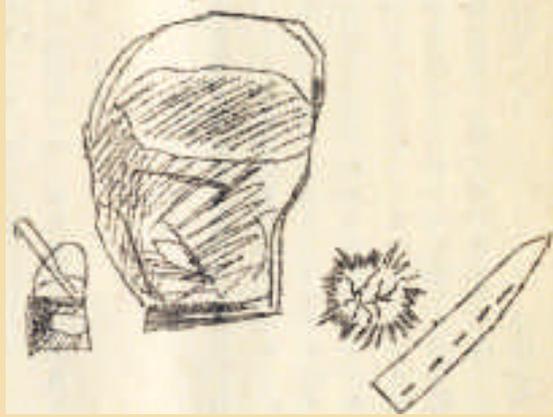
されば奥床し

（実篤）

東京大会

その一

石田 謙三



堀瑞の柳もめつきり色づいて初夏を思わせる六月三日、パレスクラブに東京馬術大会を見に行きました。ハスをおりて大手門までやってきましたが何しろ百

姓なので皇居を身近に仰ぐ事はめったにありせん。石垣の石の大きさにも水の青苔にも驚いてしまいました。百姓とあなどつたかなかなか入れてくれません。それでも待つこと三十分いかげん退屈したので白鳥に石でもぶつけたくなつたころやっと中に入れてくれました。

馬房に集つて親分から今日の注意を受けました。後は適当に自由ですので馬場へ行つて見物をします。

試合は馬場馬術から始つて、いよいよ婦人中障碍開始、まず悪名高き月雪が高尾さんをのつけてバタパタと現れました。彼は今しがた女の子をかんだばかり、コソチキシヨウ、ガンバレヨ。

ベルがなつてスタート、いつも乍ら戦車のように突進し、第一第二と軽く通過して行きましたが第六のあたりで又元へ戻つて行く様子です。親分が「アレアレどうしたんだ」と心配顔なので、変だなあと思つていたら残念乍らチヨンポ。

午後の男子中障碍は月雪がレンガ前で二拒否、青剣も最後の障碍で切られてため、結局一日目はあまりバツトしないままに終りました。

二日目は日曜日で朝から見物人がチラホラ、外人も

大勢きましたが、彼等は自動車なので門を入る時からして差をつけられました。おまけに小さな女の子まで黒い乗馬服に身を包んで、ハンでヒクヒクしながら馬を洗っている僕達とは大分違いますからね。

さて試合は婦人中障碍、昨日の続です。月雪の高尾さん今日ほ慎重に飛んで満点で帰り見事優勝。まずはメダタシ、メダタシ。

次は平木さん、渚にのって出場です。静にスタートし反抗する渚をだましだまし最後の三段へ向いましたたが左へ切られて二拒否失権。しかしあの渚がよくあそこまで行ったものです。

古びた石垣には所々草がはえていて、皇居の中には昔の香が漂っています。そこで石垣の上へ登って景色を眺めていたら、お巡りさんがやってきて、ちよつど通りかかった男の子に「崖に登つちや駄目だよ」といったのでこれにはこつちも赤くなって早々に崖を下りました。

馬場では六段が始っていました。どの馬も美事に飛んで行きます。さて剣坊は、と見ている内に一同目、二回目と無事飛びました。渚、麗、雪は失権。

いよいよ三回目一米五〇、さてどうなるか、とかた

ずをのみましたが惜しくも落下。でもよくやってくれました。これには二頭しか残らなかつたんですから。まだプログラムは沢山残っていますが残念乍ら帰らなければなりません。

馬を車に入れ、僕も一緒になごりを惜しみつつ皇居を後にしました。

馬と行く、お堀の端の青柳

その二

藤田純子

パレスで行なわれた大きな試合に、始めて参加していや応援に行つて先ず驚いたのは皇居の広い事……今度新しく、皆んなの注目的、人気の中心である会計になられた岸さんと一緒に、六月二日金曜日のお当番の為、お上りさんよろしく、大きな荷物をぶらさげノコノ皇居にやって来ました。岸さんのおぼろげな記憶を頼りに、人に開きながらやつと我らが馬房に着きました。そこには恋しい青光の姿はなく、他の四頭の馬が眠そうな目付きで私達を迎えてくれました。一頭づつ、馬の様子を見ながら「優勝しないかなー」をなんて勝手な事を考えて、一人楽しんでいました。する

と岸さんが「あそこで着換えないぞ」なんて、勝手知つたる他人の家のごとく物慣れた様子で叫んだので、おとなしく岸さんの後について、窓ガラスの上半分が透過している小さい納屋みたいな所で、素早く着換えしました。その日は、屋内馬場で宮内庁の方が練習しているのを見たり、馬の世話をしたりして、日が西に沈む頃パレスを出ました。

翌日、六月三日はいよいよ試合開始……この日は、

一身上の都合により渋々欠席。

翌四日は、朝早くから張切つて登場。

試合には出られないけれど、せめて草刈りでもと皇居の雑草を一生懸命刈つて、勤労奉仕まつたく、税金払っているのがバカらしくなりましたハイ（父に代つて一言）

やがて、待望の試合が始まり、我らがホープ高尾さんは、月雪に乗って満点でゴールし、私は月雪を見直しました。試合前に、高尾さんに乗せた雪にニンジンをおあげたら、素直に食べました。馬房にいる雪は恐いという先入観のせいか、あせり魅力ありませんでしたが、この日の雪は、おとなしくて、繁々と眺めたら、

目がとてもチャーミングで本当に可愛いなと思いましたが、（調子良くてスイマセソ）可愛いと言えは渚もとても可愛いです。最近荒れているようですが、以前一匹で馬房にいる時、草を与えに行ったら、とても喜んで帰ろうとすると「ヒヒーン」とないてこつちをじつと見つめるので又行つてやつたら首を振って喜びました。渚はきかん坊の反面、とても寂しがり屋さんですね。

話は前に戻つて

婦人障碍が終つて、天宮さんと、ジャーマンベーカーリで何か食べようと、勇んで席を取り、預っていた高尾さんの薄よこれた、ぬれた手袋と、私のきたない手袋と、袋に入った少しのキャンデーをテーブルの上に置いて、二人で少しの間席をはずし、すまして戻つて来たら、置いてあつたはずの手袋が無く、キャソデーだけが置いてあり、席には誰かが座っていました。高尾さんの大事な手袋を無くしては申し訳けないと、急でメイドさんに聞いたら、捜してくれ、ゴミ箱の中をゴソゴソあさつて、ようやく出てきました。

隣りに座っていた外人は楽しそうに笑っていました。全く、恥しくて、しゃくだった。

（高尾さん見て見ぬ振りをして下さい）

そんを訳で、そこをあわてて飛び出し、今度は六段の試合を見ました。これは一番スリルのある試合で、気の小さい私は見るだけでドキドキしてしまい、落着いて見物出来ませんでした。

青剣の調子はすばらしく、メートル四〇を飛んだ時は正直言つて以外でした。剣坊は将来性のある馬だと上級生から聞いて知つてはいましたが、よその馬場であんなに飛べるのだとは思いませんでした。

次のメートル五〇ではすぐ飛ばしたので驚きました。結局メートル六〇に挑戦したのは、二人で、一人は、丸善石油の人で、あと一人は、獣医大学の学生だったと思います。

丸善の馬は確か黒色の馬で、名前を「パンザイ」と言つた様を気がします。景気のいい名前なので何んとなく覚えてました。

私は獣医大学の学生の謙虚な態度にひかれ応援しました。

すぐ前を通つた時「しっかりと叫んだら、こちらを向いて「ハイ」とうなずいたので、うれしくなりました。その時の彼の自信に満ちた顔を見た時、これは

一米六〇飛ぶんじゃないかなと思いました。

一回目は惜しくも失敗しましたが、二回目には見事飛びました。

でも記録では一米五〇だそうです。

試合が終つて彼に偶然会つたら、顔中口かと思われくらい、うれしそうに笑つてました。彼の名前は忘れましたが梅という字が付いたような気がします。

女子馬術術ついで

菊池 由美子

女子学生馬術大金も回を重ねること七回になりました。平木、福原両先輩の時代に創られた輝かしい業績がここまで続けられて来たのです。関東女子学生馬術連盟という名の下に毎年二回、春・夏行われる試合はいつも母校が優秀なる成績を収めて参りました。今年も先輩に負けと頑張り続けて早や四年、リーグ戦優勝のあの味はとても言語には表わせない。いや、山海

の珍味と云えども味わえないものでした。青山の女子の何とか魂を遺憾なく發揮出来る貸与馬リーグ戦、そして丙種二鞍に障碍二鞍乗れる……と御機嫌だつた代表選手権、きつと先輩の方々にとつて思い出多い試合であつた事でしょう。勿論私達にとつてもそれは魅力のあるものでした。もう一度頑張ろう、張り切ろうとフアイトが燃えてなりません。

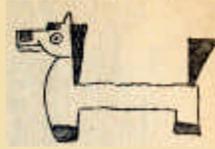
時まさにオリンピックを迎え、我々女子学生も一段の心構えをしなければなりません。そもそも貸与馬戦とは日本古来独特の軍隊馬術からの出身ということでもあります。欧米の貴品高き伝統ある馬術にはそのようなものはなくすべては自馬競技だそつです。我国に於ても学生馬術の重要な要素である貸与馬式競技が衰退を見せ自馬競技が盛んとなつて来たよつです。

「女子学生も本来の馬術の姿である自馬戦にすべきだ。」との命が先日ありました。自馬戦・確かに危険率も少ないでしょうし、自分達の愛馬で人馬一体の馬術競技は理想の馬術大会でしょう。しかし学生である私達 スリルとサスペンスを求め、試合前のあの一瞬、そしてシャムプ・勝負にすべてをかけ、その中にスポーツマンとしての喜びと苦しみを見出す私達学生

にとつて、どんなに對与馬戦は魅力のあることでしょうか。しかし、女子の馬術ということを考えてとつぱかり云つておれません。危険もあることです。試合中の何て落馬の多いこと、そして失権馬の続出、与えられた馬はそのくせも、危険なことも解らずその時だけフアイトと技術によつて乗りこなさなくてはなりません。現在の馬匹状態は一般に良くなつて来てます。それでも女子に無理な馬の多いことは勿論です。馬術という特殊のスポーツに於てその競技は人より馬にあります。オリンピックを近くに迎え、今こそ自馬戦に切り変る時期であるよつです。そして女子は馬場馬術へと進めて行きたいと思ひます。

関東女子学生馬術リーグ戦は来春から自馬競技と変わります。
関東女子学生馬術個人戦は新人障碍を取止め、新人部班のみ、選手権は第一次丙種第二次障碍になります。





馬事講習を

かえりみて

小宮 紀 六

十五日間、全国から集った馬友と共に、講習会を終え、今ここにペンを取っていると、私が講習前に考えていた事を、はたしてどの位なしえる事が出来たであろうかと考えざるを得ない。私は馬事講習に参加し、大障害を飛んでみたいとは思わなかったし、又馬場を一生懸命ふんでみようともしらなかった。技術的な面からいえば私はこの講習会で、正しい乗馬姿勢の会得及堅固なる騎座の養成という二点にのみ、自分の現在持つている力をより伸そうと思つた。技術的にたしかに得るべき事があり、又それが多少なりとも自分の身についたという事はある。しかし私がこの講習会に於ては、十五人のこれから次の代のそれぞれの大学に於ける馬術部というものを作り上げる人達の生活態度

及相互の親睦という事を観察したかったし、又親しみを密にし、横の連絡をとつていきたかった。そして更にこれからの時代を握る者達と共に生活し、これからの学生馬術のあり方を語り、闘志を燃やし、又ある時はビールを傾けながら、女の話をし、その中に自身自身を見出し、これからの青学の馬術部の為他校の者達に一步もひけをとらず為しとげる自信と闘志を身につけたかったのである。私は常に青学の馬術部員であるというプライドを持つて生活したつもりである。地上に於ける馬上鍛錬とはありうるであろうかと皆で考えた事があつたが、結論は、馬上感覚は鞍数によつて決定されるのであるから、この鍛錬は馬術に於ては存在しないという事に落着いた。それは確かにそうであるが、私自身として、又よく青学の運動部とは線の細い事といわれるが、馬術部であるよりも前に体育会の部員でなければならぬと思うのである。それには何も馬に乗るだけでなく、あくまでもスポーツマンになつて欲しい。これは、これからも馬術部に於ても問題にしていいのではないかと思う。講習会中自由時間に農大の相撲部のケイコを見学しに行つた。皆がよく云う根性とは一体どういふものであろうかと少しはそこ

から得るものがあればと期待して。やはりそこには、我々の部とは何か違つた雰囲気、体育会の部であるという事を意識せざるを得なかつた。それは、上級生からどうしろこうしろという問題ではなく、要は自分の心の問題に結末する事であろう。十五日間一諸に生活した者として、馬車公苑全体から全ての事を出来るだけ見てこよつと思つたことは、それがプラスにこそなれ、マイナスには絶対なつてないはずである。ここで得た知識、ライバル意識、親近感、それが私が多少なりとも体験して獲得したものである。又ここで得た学問的知識を同輩及後輩に伝える為に馬車公苑を去り、この講習会で得た精神的な面及学問的な面を基にして、更に皆の考えをいれこれからの馬術部、次の代の馬術部の発展の為に努力したいと思ひます。又この忙がしい中に私の様な者を講習に参加させて下さつた堤主将以下、部員一同に心から感謝します。

学 科

馬の歩法



清野 先生

馬には大きく分け二つの歩法がある。

自然歩法、不自然歩法というものが有りその他不正歩法というものがある。この場合馬の行う歩法は騎手の馬に対する正しい扶助を行わなかつた時即ち扶助の悪さがある。従つて新人が馬に乗る時馬はしばしばこの様な歩法を行う時がある。また馬の身体の故障、腹が痛いとか身体の調子の悪い時更に馬装、鞍のおき方が悪い場合、それが原因で鞍傷を作つたり、腹帯がすれて傷が出来た場合等この点に於ても大いに注意をくば

らねばならない。

- 歩法 — 運歩 の 方法
- 歩度 — 歩歩 の 速度
- 歩様 — 運歩 の 様子
- 歩調 — 運歩 の 調子

この様に我々馬術を志ざしているものは少くとも右の様な事を知っていなければならぬ。これを知らないで脚がどうのこうのとかがぶしはどののという事は云えない程である。最も基本的な事として属体の名称とか装アン、手入れのやり方とかを新人におしえる前にこの様な事をおしえたいと思つ。

歩法に於ける自然歩法には四つの歩法がありその一つは常歩であり、また速歩、駢歩、襲歩である。大体常歩は一分間一二〇m、速歩二二〇m、駢歩三二〇mで襲歩というのは馬体というものが完全にのびきつてゐる状態である。



右図が自然歩法に於ける四つの歩法である。この様に我々は騎上にある時は今ほどの足がどうなつてゐるといふ事を感じとる事に細心の注意を払いこれをつかみとらねばならぬ。そこに始めて馬に乗つた意義があり進歩があるはずである。

扶助

扶助とは、タズナ、騎座、脚により騎手の意志に馬を服従及従順させるべきことである。従つて扶助といふものは馬術にとつて最大の要因でありこれにより馬といふものを手の内にいれまとめる事が出来るのであり大の男がタズナを思いきり引っぱつたら馬はひっくりかえるか反抗してそのままつていつてしまつたらうが女の人がこぶしを握るだけでびたりと停止するといふ事は即ち扶助といふものの力である。

タズナ、行進力向を示す。速度の調節、馬の姿勢及歩調を交える。ひかえ、押、許すの三つがある
馬術に於てはひつぱるといふ事はいわずあくまでひかえるといふ語を用いる
騎座、諸扶助の基礎と馬上の安定、馬の運動を主宰する

脚、馬体を、前方に押し出し後駆を指示する従つ

て後進もまた前進である。

以上の様に馬術の最高目標というのは最少限の力で最大限の能力を発揮させるところにある。また馬術は芸術であり芸術であるからには美でなくてはならない。

馬一般について 妹尾先生

馬の元祖は北米と北欧にみられた。時代の変遷と共に北欧の馬と云うものは段々と減少し北米の馬がアラスカを通つてヨーロッパ大陸に移動していった。

昔の馬は野獣から身をまもるため常に集団というものに於て発達していき普段は荒れはてた土地に住み草を食べる時にのみ牧草の生えている所へ、食べにいきそれからまた荒れはてた土地へ歸つていった。馬はこれしか外敵から身を守る術を知らなかつたのでありその為足が発達したのであると考えられている。その悲しい習性が現在もなお残つていて馬が寂しがりであり一頭離しておくと非常に悲しむという事は頷ぎずける。馬は頭が悪いが記憶力というものはすこぶる良い。かつて犯した過ちは二度と繰り返さないといわれている。馬事公苑に於ても二、三才の頃牧場から連れてきた馬が七才十才になり女の子だから子供でも生ませてやる

うと牧場へ歸してやると牧場の近くになると貨車の中で前かきをするそうである。そして駅へおろしてやると一人で牧場まで必ず歸つていくらしい。

人間というのは大体まあ一日四〇〇〇カロリーの熱量をとるといふ事であるなら馬に於ける必要熱量というのはどの程度であるうか人間を平均一五貫として馬は約一二〇貫人間の八倍、九倍の体重がある程である。

従つて馬に於ける必要熱量は $4000 \times 8 = 32000 \text{ cal}$ という事になるであろうか？

しかし実際に於てダービー中山大障害の前日に於ける飼量であつても大体一二〇〇〇 cal である。普通競馬ではしる馬又我々学生の乗馬に於ける熱量は一〇〇〇 cal を以つて標準カロリーのとする。この食い違いはどこからきているか。勿論体重だけでは必要カロリーのものは算出されないかもしれないがそれよりも馬は頭をつかかないという事からきているらしいそこが人間と根本的な差異であり結局馬には記憶力というものはあるが判断力というものがない。従つて新馬調教やその他の場合に於てもちようかいはずようかい愛ぶは愛ぶと馬の元来の本能というものを考えてやらねばならない。

馬の手入れの仕方

馬に於ける手入れ、この第一の目的は人間と馬との親和を求めにある。この意味をはき違えてきれいにする美しくする為にするのだという人がおうおうにしてある。美しくするにはぬるま湯の石ケン水でよく洗ってやればそれですむのである。しかし親和を求めるところではそれではいけないと思う。従つて馬の手入れというものは下級生特に新人にやらせ早く馬というものになら馬居とはこういうものであると身をもつて覚えさせねばならない。従つて馬になれている上級生は手入れをせずに新人のやるのを注意してやればよいそうである。これから特に暑くなるに従い馬は練習後汗をかくこの場合だれでもまず一生懸命ワラで馬の体をこすつてやる。しかしいくら毛があるとはいえ馬にとつてこれは大変痛いらしい。それでワラというものは意外にかたくこれで皮膚を大部いためている。従つてワラについているバイキンと汗とで傷が出来炎症を起すことがしばしばある。であるから汗をかいたらよくふきとつてやるとか洗い流してやると良い。又これからはワラよりも・ハスタオルのやすいのを一頭につき二枚位ずつ買つてこれで汗をふいてやるといふ事が必要で

はなかるうか。馬が練習後一番熱をもつ所はどこかであるうかそれは鞍の所である。ここは騎手の体重及鞍とのマサツにより一番熱をもつ。従つて手入れをしている間ここにぬれたタオルをのせておいてやると馬も大変気持が良いしまた疲労度の回復も大変早い。馬輸送の後又は試合ですこしつかれた後などソツコウをやらせられるが我々の現在行っているやり方では全然意味がなく効果がないらしい。これはひずめの上あたりから肩にかけ一五、六回なで上げまた首のあたりから肩のあたりまで一五、六回なで下げてやればそれだけで充分である。この様に我々が知らなかつた仕方についているいる考えさせられるものがあつた。馬も手入れする時即ち馬に接する時は恋人に持っていると同じ事と考えよといふ事を教えられた。

馬の健康について

馬というものは元来草食動物である。従つて馬を丈夫にするには草を多く与える事が大切である。馬は又エソバクというものにより改良され今日に至っている。従つて馬をよくする為にはエソバクを与える事が必要である。また一日一回大豆を二つかみ朝冷やしといつて夕飼の時にやる様になると馬は丈夫になりこれをやる

とやらないとでは大部馬自体に違いが出てくる。であるからこの様なことも金はないしてかからないのだから試してみるとよいと思う。又これから夏にかけ草を刈りにいくがこの場合葉の丸いもの程栄養分の蛋白質を含んでいる確率が多く細長いものはあまり含でない。

馬の健康を見るには尿を見るのが一番手取り早い。

尿が淡黄色で透明になったらカルシウムをやる必要があり粘ってきたらこれは疲労してきたのであるからコロイカル又は重曹を少量与え十分休養をとらせるとよい。また馬がひたいから首すじにかけ汗をかいた場合は胃の故障であるから重曹を多量にやるとよいとヒバラに汗をかいたら腸の故障であるから洗腸するまた馬の健康については以上の様な事ばかりでなく厩舎の清潔という事も大変重要な事である。従つて常に滑らかな寝ワラを支給する。また寝ワラというものは真中を低くして両ワキを高くする様にいれる事が大切である。

疝痛について

馬には牛の様に吐く事が出来ない。従つてくさつたものを食べればそれは中で腐敗する。また食べ過ぎたらそのままである。この様にして疝痛というものが起るこの状態の時馬は寝ワラを寄せる。馬房の一隅に寄る

前がき、自分の腹をみる。目が三角形になる等こついう状態をみせる。この場合馬を寝せないでひきつまなりなんなりし腸内の運動を活発にしてやる。また冷やさない事も大切に毛布などを体にまいてやる事も必要である。

騎乗日誌

小宮 紀 六

四月一六日 快晴

ハツヒカリ 拍車をものすごく嫌う馬であつた。少しでも当たるとはねて何回落ちそうにたつたかわからない。

四月一七日 快晴

パレスへ関東代表選手権を見学に行く。その帰り学校へ寄る。

四月一八日 快晴

ケソタカ 馬場姿勢にて三〇分色々、こぶし、肘の位置等について説明があつた。その後高さ1m程度の障碍二個両手前より一〇回位通過。障碍を見ると、ぶつ

とんでいき押えるのに一苦労であった。

四月一九日 快晴

ミセロ スエーデン産のサラブレッドで反動を軟く卒直な馬であった。アブミ上約一時間、あまりパテなかつた。

四月二〇日 晴

ミセロ 障碍アブミにて野外騎乗、森の中、走路、固定障碍の周りなど、大変面白かつた。その後一人一人経路をきめ固定障碍を駈歩でいった。ひっかけられる者統出。

四月二二日 晴

ミセロ 前傾のアブミ上一分、ものすごく長く感じ大いにパテタ。その後馬場姿勢でのアブミ上三〇分、それより六個の高さ八〇cmの障碍を速歩通過。

四月二二日 くもり

ハイキユウ 号令練習を行った。障碍練習一位七個左右に四回程きられた。三角点での推進を痛感。

四月二三日 晴

トラオー 歩路にて速度感覚を身につける為二〇〇mを速歩にてタイムを計った。実際よりかなり速く感じた。その後障碍練習、たつなを少しでも引くと頭を上

げ口をぶつけた。能力はかなりある様であった。

四月二四日 晴

ブラックボーイ 速度感覚二〇〇mを駈歩にて行った。

四月二五日 晴

三里 パレスにて練習。いま迄やった事のない様なかなり高度の運動を行った。馬場は全然駄目であった。

四月二六日 晴

リキフジ アブミ上にて林の中、歩路を速歩でまわつた。こんなにつらかつた事は始めて馬にのつて以来始めでであった。何回落ちそうになつたか分らない。その後更に角馬場にてアブミ上で一時間しぼられた。

四月二七日 晴

アサハヤ 馬場姿勢にて二時間、たいしてパテない。拍車がなくてもグングン出ていく馬だった。

四月二八日 くもり

四月三〇日 晴

トヨタマ 最後であるので紅白試合だった。前後名古屋工大の山本君、第一通過、第二、三拒否失権。後段にのり第三で拒否のほかあとを満点で帰らずいぶんくつた。

馬匹管理に想う

飯田 和之

過去一年有餘の間当部の馬匹向上には若しいものがある。しかしその繋留管理という点に於いてはまだまだ我々の努力は十分とは云いきれない。そこでどういふ点に問題があり、どうしたらよいか考えてみたい。即ち手入が悪いとか、水飼がついていないとかの具体的な事でないに、その様な問題に内在する本質的問題どうして手入が悪いのか、どうして水飼がついていない様な事態が起るのか、これを反省し掘り下げてみよう。

まず我々は馬をあまりにも知らなすぎるのか、かいたろうか、新入部員の多くは馬なんて乗ったこともさわったこともないのだから無理からぬ事である。だが入部後の研究がたりない様に思ふ。勿論四年

間の部生活で獣医の様に馬相学家の様に、調教師の様に総べてを知ることが不可能であろう。しかし我々は馬術部の部員であり現に五頭もの馬匹を管理しているのであるから馬の性質、生理等に関しては一応知っていなければならぬ。例へば、馬は元來草原を自由奔放に駆け、腹がへつたら草を食み、飲みたい時に水を飲むという自由な生活をしてきたのを人間がその自由を奪い家畜化した訳である。この事を想起したら、バケツの底が空になつてゐるの知らん顔していたり、草刈に行かない等の事は出来ないはずである。出来得るかぎり彼等に自由への満足を与へてやることは我々馬を飼育している者の義務である。

次に愛馬心の問題である。いくら馬事知識を有していたとしても愛馬心の發露としてそれを生かさなくては意味がない。又眞の愛馬心ある者なら、ちよつど我々が愛する人にそうする様に、もつともつと彼等を知りたく思いそれだけ努力するであらう愛するということとは彼等の気持を理解し、彼等の立場に立つて物事を考へてやることで、毛並が良いから、顔がすてきだから好きだわかわいいわとかいふ直情的問題とは本質的に異なるのではないだろうか。

より深く理解する最上の方法はそれだけ多く彼等と接することと不断の観察である。勿論我々には部生活以外に学校があり、それぞれの私生活というものがあるのだから、彼等を理解するに十二分の余裕を持たないかも知れない。しかしこれは我々自身で選んだ道の一つであることを認識して常に最善の努力をしなくてはならない。馬匹管理の大前提馬を理解し愛するという努力を！

遠乗り

法一 B 真野 勝

前夜、ものすごい雨を降らした雲が、まだ名残り惜しそつに、一面の空をおおっている。しかし、そんな重苦しり空模様とは反対に、俺達の心は麗かな陽を浴びたように軽いものだった。誰か口笛を吹く者もいた。俺はハーモニカが吹きたくなる。こつした乗馬体の群が、荒果ててはいるが広々とした草原や、ずっと彼方の方まで伸びているぶつ飛はしてみたくなるように巾の広い街道で、個々、自由縦横に乗回す光景は、側

の誰が見ていてもきつと和かなものであろう。つい前々日迄の網島に於ける強化合宿、かの張りつめた空気の中での騎乗……うるさい罵声にも似た四方、八方からの先輩の注意（失礼！）を受けたのと違い、殆ど大きな、まろやかな自由を、俺は大層に意識してみろのだ。名も知らぬ雑草が密集しては生茂る荒原、時々、雌牛がゆつたりとした動作で夏草に戯れている。曇つていつも富士山がみえれば、それを呑気な事を考える。牧歌的だ……。と、突然、二頭、三頭の馬が狂いだしたように駆けだす。殆ど同時に、三、四頭、五、六、これも後から引かれるように続く。誰かが土人のように奇声を発する。『止まれ！止まれ！』先輩のあわてる声、だが止まらない。俺は愉快になってなおもペンを二、三発入れた。前を駆走る女子、二、三人が、あつと云つ間に落ちる。軽快な、全く見事な早技である。しかしあとがいけなかった。『ドデン、ズシン』

バタン！：

俺達一年生が始めて御殿場へ来たのは、入部して間もない五月である。まだ一様に、馬、そのものに慣れきつていなかった俺達だ。正直に言つて少し不安でもあった。行く前日、或る先輩曰く、『救急箱、用

意、これでは女子ならずとも少々の恐れは無理からぬ事である。しかし当日、そんな衣過剰な諸注意も忘れる程の、ものすごい青空。かすんではいるが、俺にとつて、あんなに大きく、はつきりと、もちろん美しくみた富士は始めてであった。五月のさわやかな空気が思つ存分満喫できる。まだ行き始めの町中の街道で、皆んなの分隊に遅れをとつた時、始めて、あの馬のふつくらしたお尻に、恐々と、しかし思切りペンでひっぱたいて、夢中にたて髪につかまって走らせたのも、今では愉快な想出である。次第に慣れてくれば、四、五人が同様に、奇妙な声をはりあげて突走る。幼き心の名残りなのか。未熟なる小生達には、それ程の壮快な、スリル溢れた遊びは他にない。一種の優越感さえ意識する。しかしこの優越感こそ、未熟なる俺達には乗馬の髓なるものであるつか。帰りの途、俺達は道を間違えたが夢中に突走した。どこを走っているのか分らない。唯道がずつと伸びて行く方へと、夕日に映えた富士を背に、今思えば一枚の絵のように鮮明な印象である。

俺の母が聞いた。何故 あんを貴族趣味を、しかもお金の掛るクラブを選んだの、何故馬など乗りたい

の、俺はこう答えてやった……貴族趣味でも何でもないよ。唯、あのジョージヤコウジ君のような幼い心で持つて、西部劇をみるのさ、そしたら乗りたくなる心も分るだろうよ……と。ジョージヤコウジ君は俺の兄貴の小さな子供である。ところでこの種の童心を満してくれるのが遠乗りなのである。実に痛快な幼き心なのである。

或る女子部員が言った。……もし馬術部に遠乗りなどという面白い附録がなかったら、私など、とうにやめているでしょうね……。この言葉にはある程度の反発も感じるが、何もかも未熟である俺達にとつて、これは隠す事の出来ない事実である。馬を通して親睦を保てる最大の活動であるからだ。強いて言えば、「遠乗り」そのものが、日常のクラブ生活とは全くかけ離れた別個のよつをものにさえ感じられないでもない。楽しい遠乗りを、楽しく日頃のクラブ生活に、いかに結びつけるかが、これからの俺達一年生の考えるべき重要な問題であるう……。

おい、ダービーをやるうぜ、よしきた、

「ヨイ、それ行け!」、俺達は再び子供心にかえる。乗馬の技術が何んでもあるうと、俺達は本当に、楽しく

愉快、健全に、遊ぶ事が出来るのは、これだけである。そう意識しながら走らせるのだから：！あつ！又一人、二人、落つこちた、全くきれいに落ちるのだなあ、慣れっこみたいだ。だが、やっぱりあとがいけない。勇敢なる女性諸君は草原の上で、しばし立ち上れぬ身とあいなつた。その内、俺も派手に落つこつてやるかな、その時は皆んな良ろしく介抱頼むぜ。だつて俺だつて、そんな痛快味のあるスリルを味わいたいんだよ。調子にのつた俺は、二度、三度鞭をあてる。と、ズン……。あゝ地球が美しい。グルグルまわっている。完全なる無重力状態つて、こんなものかなあ…。



その一―新築通知―

残暑の候、皆様には、お variability なく御清栄のことと存じます。さて当家におきましては神奈川県港北区南網島町、青山学院大学総合グランド馬場内に別荘を新築いたしましたのでお知らせいたします。

建坪約三坪で藤根建設~~※~~請負のもとに無級建築士飯田氏神藤氏及び青山学院馬術部土木建築科の実習生の協力により建られました。環境は大変すばらしく、すぐ近くにラグビー場あり野球場ありテニスコートありで又彼方に富士の霊峰をあおぐ事も出来ます。先輩の皆様には気分転換の意味では是非保養にいらして下さい。 右お知らせまで

藤 根 拝

PS 福原先輩材木どうもありがとうございました。

その二―現代の奇跡―

合宿中馬場の周囲のドブを清掃したところ、イルワイルワ、ドジョウがドブの中に、それもシャベルでド口と共にすくつたのが二十数尾まして捕らなかつたのはもつといるはず。一旦つかまつたのも、もつと増殖しようとする訳で再び放魚と云うのは裏面的理由でどうも男子部員が水溶性養分(?)をやりすぎるので食べると栄養過多になるかららしい。しかし、先輩方でスタミナのない方は…としよう…食べにいらして下さい。だがこんな沢山のどじょうが外界からカク離されている馬場へどつて入って来たのだらうまさに現代の奇跡

その三 「大砂塵」 綱島版

「もうもうたる大砂塵の中を馬上姿も勇ましく」といつたら映画「大砂塵」のシーンを思い出す人もいるでしょうが、これは綱島で実際に起るお話し。

一週間も雨が降らないで強風が吹いたらサア大変

もうもうたる黄塵がラグビー場から突進して来て皆の顔はインデアンのごとし、口の中はジャリジャリ、あげくのはては住宅のオヤジ連中にドナラレル。

かような事態がヒソ発する様では満足に練習出来ない。学校当局もなんとか善処してほしいもの。

その四 新部員紹介

オレ「ポケ」です。皆さんはオレがポケツとしていから、ポケ」でいいやなどかかってな名前付けちゃつて…生れは近くの農家ですが縁あって、この馬術部の部員になれ光栄です。

種類は云つなれば中間種で毛は河原毛というところでしょうね。まだ入部して三ヶ月ですが皆さんにかわがられ幸福です。

その五 部室新設のお知らせ

発展の一路をたどる当家に於いては先日綱島に別荘を新築しましたが此度本家におきましても部室が新設されました。

先輩諸氏に於かれましてもぜひ一度いや二度三度とおみやげを持っていやおみやげはどうでも何はともあれ来室下さいませ様お願いします。

(学生会館三階三〇九号室)

主な出来事

一月二二日 初乗会

毎年OB現役が親睦の意味で開く初乗会は、今年は綱島の新馬場で行う予定であったのを馬匹の関係にて馬事公苑にて行い例年の如く寒風の中で熱戦がくり広げられた。

成績 琴平競狭

- 1 青木虞次
 - 2 高尾友子
- 巻乗競技
- 1 平中岩崎井田グループ
- 小障碍競技
- 1 青木 昇
 - 2 青木真次

OB対現役戦　OBの勝

二月二七日　送別会

YMCA地下食堂にて男子合宿中の二七日に行なわれ、出席者は岩崎、山口、木田、井田、原田、水島、西谷の卒等生の他現役部員全員にて盛大に行われた。

五月七日　新入生歓迎会

二年主催新入部員歓迎ピクニックは五月晴れの空を仰ぐ相模湖で楽しく行なわれた。まだいくらかかたい高校生臭を残している新入生諸君には始めて大学生活の青春の喜びにひたる事が出来、「先輩、まあしつかりやりたまえ、後輩、ハイッよろしくお願いしせず。

五月二二日　緑鞆会総会

恒例の緑鞆会総会がYMCA地下食堂にてOB二〇数名と現役六名にて行われた。初めに会則審議が行われ、規約六条の会費二〇〇円を二五〇円に値上し次いで專業報告、会計報告と進み、最後に役員改選にて會長青木真次、会計、内藤喜嗣、幹事青木昇、沈迺浜、福原美里、小池信夫の各氏が再任し新監督に藤根威一郎に平木茂子、新幹事に上原光代、岩崎修が就任された。

六月一〇日　部員親睦会

関東学生　トーナメントに備える強化合宿中、部員間の親睦会を交友会館で行われる。当日は藤根新監督も来られる。

「マコト愉快なゲーム、想出の勇しき先輩をハミリ映写で、又アラ恥しきダンスなど、さながら総会パーティーの感であった。皆さん、仲良く、手を組んで……」
六月一八日

一年生には最初の遠乗りが初夏の富士をくつきり浮きだたせる御殿場で行れた。

「乗った姿はミメウルワシキ……、アー、シカシ勇しき乙女達は、ソレワ勇しき最後を遂げられたり。ドデーン！悲愴なるか、ウーン」

「しかし、慣れっこなれば平ちやらよ！私、この馬ノバシチャウワ、哀なる百姓馬は懸命に走った。そして……とつとつ伸びちゃった。お蔭で我々一年生は大いにエソジョイしたというわけさ。藤根さん、高尾さんがゲストとして監督は高倉氏、神藤氏」

七月一七、一八日

先回に次いで、今度は一泊、というわけで同じく御殿場に来たわけだが、天候は悪いし、富士の顔も汚ねいし（だって見えないんだもん）でもけっこうみんな

童心にかえって大いにハシャイダ。こういう遊びは矢張り子供にならなきゃあ面白くないんだね。

野郎、弁当持って来てくれネエー持って来てくれネエーというから、みるよ女の子、けなげにこしらえてくれたじゃねいか。しかも帰る時すっかり余らす程沢山に！“弁当代トルワヨ、オカシ代トルワヨ　ドウモ、ドウモ、スイマセソ、コレカラモ、マイド、オネガイシマス！”

編集後記

僕達にとって編集などと云う事は全くの未経験な事にて、編集していく内に如何に僕達の能力の無い事を思い知らされ発行すらも心配されていたが、どうやら出来ました。

又OBからの投稿が少く残念ですが、これからは年四回発行の予定でありますからどしどし“いなゝき編集係”までお送り下さい。

「いななき」四号（非売品）

昭和三十六年九月三十日発行

発行所 東京都渋谷区緑岡二二

青山学院大学馬術部

代表者 堤 義 則

編集責任者 神 藤 重 光

高 尾 友 子

印刷所 豊島区池袋一ノ五二五

共 栄 タ イ プ 社

電話 971 九一七

